

講師：尾上圭介先生（東京大学名誉教授）

- 「陳述」と「モダリティ」とはイコールの概念なのか。
- 半分は正しく，半分は正しくない。
- 「陳述」概念には二種類あり（山田の陳述と時枝の陳述），「モダリティ」概念にも二種類（A 説モダリティと B 説モダリティ）がある。その二種類どうしが複雑に絡み合い，錯綜している。

陳述論（= 文成立論）の二種

- 山田孝雄 1908, 1936 : 述語の統覚作用によって文が成立する。それが述語の陳述に表れる。
- 時枝誠記 1941 : 文末辞（助動詞と終助詞）の主体的作用によって文が成立する。（山田の陳述と時枝の「文末辞の統一作用」を重ねたのは時枝。）

モダリティ論の A 説, B 説

- A 説：非現実領域の事態を語るときに表れる意味。
 - ↳ 山田の非経験の内容。すなわち，
推量（メリ，ベシ，マジ，ラム，ラシ）+ 非現実性の内容（ム，マシ，ズ，ジ）
Lyons, Langacker などの modality 概念。
- B 説：発話時の話者の主観が文法形式によって表現されたもの。
時枝，渡辺実，仁田義雄，中右実ら。
- A, B 両説は，一方が成り立てば他方が成り立たないという関係にはない。
ただし，B 説の内容を「モダリティ」と呼ぶのは日本特有のこと。

時枝の「陳述」をめぐって

- 金田一春彦 1953, 時枝の文末辞の中で話者の主観的表現を表すのは不変化助動詞（ウ，マイ，ダロウ）のみ。これらの助動詞の文末終止法でない場合は，不変化助動詞に含めない。
- 渡辺実 1953, 全ての助動詞（と終助詞）は連続する。（対聞き手か対内容かの働きの観点において。）（← 詞辞連続説）
最文末の助動詞が主観的表現となる。
- 時枝誠記は，このウ（ヨウ）問題に関して，表面的には超然。（実は⇔金田一）
自分はそんな細かいことを言っているのではない。
文末辞の主体的作用（≠主観的作用）が文を成立させると言ったまで。

この延長上に問うべき問題

- (1) ウ（ヨウ）の終止法（文末用法）と非終止法の意味の差はなぜ生ずるのか。「文末用法では主観性が大きく見える」ということに解消されない。 cf. 古典語
- (2) ウ（ヨウ）の主観的意味は、なぜ推量と意志（勧誘）にきわまるか。
- (3) 他の助動詞が文末にあっても、なぜ意志側の意味を表さないのか。

文献

- | | |
|-------|------------------|
| 山田孝雄 | 1908『日本文法論』 |
| | 1936『日本文法学概論』 |
| 時枝誠記 | 1941『国語学原論』 |
| 金田一晴彦 | 1953「不変化助動詞の本質」 |
| 渡辺実 | 1953「叙述と陳述」 |
| 尾上圭介 | 2006「存在承認と希求」 |
| | 2012「不変化助動詞とは何か」 |